

ねん がつ いつか
2023年2月5日

ねんかんだい しゅじつ
年間第5主日

きくち いさおだい しきょう
菊地 功大司教 メッセージ

マタイ福音は、「地の塩、世の光」としてよく知られているたとえ話を記しています。

食物に味をつけたり腐敗を防いだり、塩には様々な役割があり古代から貴重な存在とされていますが、塩が貴重な理由はその存在それ自体ではなくて果たす役割にある事が指摘されています。同様なことが光についても指摘され、光それ自体の存在が貴重なのではなく、その果たす役割によって存在の重要性が与えられていることをイエスは語ります。その上でイエスは、ご自分に従う弟子の心づもりに触れています。

「あなた方の立派な行いを見て」褒め称えられるべきは、その行いを実行する者ではなく、「あなた方の天の父をあがめる」ためだと述べるイエスは、弟子が与えられた務めを忠実に果たしているかどうかを問いかけています。果たしてわたしたちはどうでしょうか。わたしたちが果たすべき役割に忠実であることによって、わたしたちにいのちを与え、救いへと招いてくださる主ご自身がたたえられるような、そういう弟子でありたいと思います。

2月5日は日本二十六聖殉教者の祝日でもあります。聖パウロ三木をはじめ26人のキリスト者は、1597年2月5日、長崎の西坂で主イエスの死と復活を証ししながら殉教して行かれました。殉教者こそは自分の栄誉のためではなく、自らの存在と自らの受難と死を通じて、主イエスを証しするための道具となる道を選んだ人たちです。

教皇ベネディクト十六世は、回勅「希望による救い」のなかで、「人とともに、人のために苦しむこと。真理と正義のために苦しむこと。愛ゆえに、真の意味で愛する人となるために苦しむこと。これこそが人間であることの根本的な構成要素です。このことを放棄するなら、人は自分自身を滅ぼすこととなります(「希望による救い」39)」と苦しみの意味を記しています。

苦し^{くる}みは、希望^{きぼう}を生^うみ出^だす力^{ちから}であり、人間^{にんげん}が真^{しん}の神^{かみ}の価値^{かち}に生^いきるために、不可^ふ欠^{かけつ}な要素^{ようそ}です。苦し^{くる}みは、神^{かみ}がわたしたちを愛^{あい}されるが故^{ゆえ}に苦し^{くる}まれた事^じ実^{じつ}を思^{おも}い起^{おこ}させ、神^{かみ}がわたしたちを愛^{あい}して、この世^よで苦し^{くる}むわたしたちと歩^{あゆ}みをともにされてい^いることを思^{おも}い起^{おこ}させます。

「殉^{じゆんぎやうしゃ}教^ち者の血^{きやうかい}は教^{たね}会の種^{たね}である」と、二^に世^{せい}紀^きの教^{きやうふ}父^ふテルトウリアヌス^{ことば}は言^{のこ}葉^はを残^{のこ}しました。

教^{きやうかい}会^{かい}は殉^{じゆんぎやうしゃ}教^ち者^{しや}たち^{たち}が流^{なが}した血^ちを礎^{いしづえ}として成^なり立^たっていますが、それは悲^ひ惨^{ざん}な死^しを嘆^{なげ}き悲^{かな}しむためではなく、むしろ聖^{せい}霊^{れい}の勝^{しょう}利^り、すなわち神^{かみ}の計^{はか}らいの現^{げん}実^{じつ}における勝^{しょう}利^りを、世^よにある教^{きやうかい}会^{かい}が証^{あか}しし続^{つづ}けていくという意^い味^みにおいてであります。わたしたちには、同^{おな}じ信^{しん}仰^{こう}の証^{あか}しを続^{つづ}ける責^{せき}務^むがあります。